授与機関名　順天堂大学

学位記番号　甲第 2863 号

Pathologic method for extracting good prognosis group in triple-negative breast cancer after neoadjuvant chemotherapy

トリプルネガティブ乳癌における術前化学療法後の予後良好群抽出のための病理学的治療効果判定方法についての検討

江口 有紀（えぐち ゆき）

博士（医学）

論文内容の要旨

術前化学療法をうけた乳癌患者の病理組織学的治療効果判定方法は十分に検討されていない。これまで、肺癌、膵癌、大腸癌において、残存腫瘍の最大割面の面積を測定し評価する方法（ART）の有効性が示唆されているが、乳癌においてはいまだ ART 法の有効性を検討した論文はない。この研究の目的は 乳癌における病理学的治療効果判定方法としての ART の有効性を評価するとともに、既存の効果判定方法と比較することである。

国立がん研究センター東病院にて術前化学療法を受けたトリプルネガティブ乳癌(TNBC)147 例の残存腫瘍の最大割面における残存腫瘍面積（ART）を測定した。ART0 の症例を除いた症例で、無再発生存期間（RFS)をエンドポイントとして ROC 曲線を描画し、カットオフ値を決定し、ART0、ART-low、ART-high の 3 群に分類し RFS と全生存期間（OS）を評価した。

ROC 曲線を描画した結果、ART-low と ART-high をわける cut off 値は 136mm²とした。ART0 の症例と、ART-low(0<ART≦136mm²)の症例に統計的に有意な RFS,OS の差はなかった（それぞれ P = .738 と P = .703)。また、ART0、ART-low 群と比較し、ART-high 群(ART>136mm²)は RFS と OS が短かった（P ＜ .05)。多変量解析の結果、ART と ypN 因子が、RFS の独立した予後因子だった。ART-0 かつ ypN(-)群と、ART-low かつ ypN(-)群は、RFS、OS ともにその他のグループより有意に長かった（P＜.05)。さらに、RFS、OS ともに、ART-0 かつ ypN(-)のグループと ART-low かつ ypN(-)のグループの間に有意差はなかった（それぞれ P = .249 と P = .554)。また、ART は他の病理学的評価方法と比較しても、よく予後を評価できていた。

我々は 術前化学療法を受けた TNBC 患者における病理組織学的治療効果判定方法として ART 法が有効であると結論づけた。また、ART-0 かつ ypN(-)（病理学的完全奏効）の患者だけでなく ART-low かつ ypN(-)の患者においても、術後化学療法を省略することができる可能性が示唆された。